年間第２６主日

すべてのいのちを守るための月間
世界難民移住移動者の日

福音朗読　マルコ 9・38-43、45、47-48

2024.9.29　9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
クラレチアン宣教会　昌川信雄神父

今日の福音、私たちの人生というのは本当の幸福である「神の国」を目指して歩む長い旅だと言われます。道中を楽しむための旅ではありません。

ここに、かつて日本に来られたフランシスコ・ザビエルと忍室和尚（にんしつおしょう）という人の対話があります。お聞きください。

1549 年、フランシスコ・ザビエルが鹿児島上陸後、薩摩藩主、島津家の菩提寺、福昌寺の老住職さん――忍室和尚と言います――この方を訪れたときの対談が残っています。

和尚がザビエルに来日の理由を尋ねたとき、ザビエルは答えました。「キリストによって日本国民の霊魂を助けるため、只それだけのために参りました」と。そしたら老和尚が「一文（いちもん）の利益もないのに、只それだけのために来たのか」と返したんです。それで、ザビエルがまた答えます。「一人の魂を救うためにはそれだけの苦労と犠牲を忍ぶ価値があります」と。

ここで、今度はザビエルが和尚さんに質問しました。「和尚さん、青年期と老年期といずれを好むか」と。（皆さん、どう思いますか。青年期と老年期とどちらを好みますか？）この和尚さんは答えたんです。「青年期」と。「なぜなら、青年期には身体強健にして望むままに事を行いうるから」と。（皆さん、同じですか？）そしたら、ザビエルが「では、航海者が荒波の大海のただ中にいるときと港に近づいたときと、いずれがよいか」と返したら、この老和尚さん気が付いた。そして「あなたの言わんとするところはよく分かる。航海の目的港を持つ水夫にとって港に近づくのは好ましくて、人生の目的を死後に期待する者にあっては死を控えた老年期を喜ぶであろう」と言ったんです。

しかし、死後の世界は何もない虚無であると信じていたこの老和尚にとって、ザビエルが説く「人の肉体は土と化しても、魂は永久に生きて、もし現世でどれほどの権力と財宝を手にしていても、もし魂を失ったらどうするのだ」というザビエルの説は和尚の心をいたくかき乱すものだった、ということです。

これ、『日本キリシタン殉教史』の中に著者の片岡弥吉（やきち）が記しているんです。

さて、わたしたちの救いというのは、この世のもので満足を得ることではありません。道中、病(やまい)や不自由や不幸としか思えない人生があっても、心に神を持ち続けているなら、その人は神の国に到達している人なんです。

聖書に、イエス様がペトロに言っている言葉があります。
「ペトロや、お前は若いときは自分で帯を締めて、行きたいところに行っていた。しかし、いつか年をとったら、他人に帯を締められて、行きたくないところに行かされる」(ヨハネ 21・18)。
「若いときは自分で帯を締めて」、つまり自分のやりたいこと、好きなことをやって「ああ、自己実現」って言ってるんですけれども、それは自分だけの世界です。ところが、「いつか年をとって、他人に帯を締められて、行きたくないところに行かされる」、つまり自分からは決してやりたくない仕事しかやらされないときが来たとき――例えば、寝たきりになることかもしれません、車椅子の生活になることかもしれません、あるいは、お医者さんから残酷にも死の宣告を受けるようなガンの告知かもしれません――そんな仕事、自分からは決してやりたくないんですけれども、この仕事しかやらされないときが来たとき、それを受け入れていく人は、世界中で一番尊い仕事、そして一番優れた祈りだそうです。イエス様がそういう生き方を残していかれたからです。

さて、わたしたちはどうでしょうか。
自分の人生が、道中、どんな病や不自由なことや不幸としか思えない人生であっても、心に神を持ち続けているなら、その人は神の国に到達している人なのです。神様に従うために、苦しみや十字架を受け入れている人は、イエス様がおっしゃっているでしょ、「たとえ片足になっても、一つの目になっても神の国に入る方がよいのですよ」(マルコ 9・45、47)と。

わたし、子どものころ聞いた説教、今でもはっきり覚えてるんです。あまりにも強烈な説教だったから。ある神父さんがこんなことをおっしゃったんです。「人生で一番あなたが愛したもののところに、死後、神様があなたを連れて行ってくださる」と。
皆さん、今何を一番愛してますか? 富やお金を愛した人は、富のところに連れてってくれるんですよ。嬉しいですか? でも神様の火、聖霊の火で燃やしたら、灰も残りません。無なんです。全く何もない無の中にポツンと置かれるんです。それ、聖書の記述では「外の暗闇で一人歯ぎしりするだろう」(マタイ 25・30)という状景です。これ、地獄の意味です。
富やお金は神様の義の火で燃やしたら灰も残りません。残るものは愛、神様だけです。愛の中に神様そのものがおられますから。そして、富やお金を愛した人は外の暗闇で歯ぎしりすることになるのです。

どうか、わたしたち、この世における人生、どんなことがあってもわたしたちは神様を心に思って、その十字架を神様からいただいたもの――最終的に幸せを用意しておられる神様が「幸せに辿り着くまでにあなたにこの体験をしてほしい」と思うから、そういう十字架とか苦しみを神様が癒さないで手を置いておられるんです――だから、わたしたちは、用意しておられる神の国の幸せを思って、前倒しでこんな祈りが出来るのです。「神様、この現実を感謝します。この現実のゆえにあなたを賛美します」と。

この祈り、これほどの信仰の祈りはないでしょう。神様が最も喜ばれる信仰の祈りです。覚えておいてくださいね。どんな現実があっても――嬉しいときはもちろん――でも苦しい十字架のときも、特にその時に効果があります。「神様、この現実を感謝します。この現実のゆえにあなたを賛美します」と。感謝と賛美です。

どうぞ、今日ご聖体をいただくときに、この祈りが出来るように、マリア様にお願いいたしましょう。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。
PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi
携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/